

# 日本人大学生の表現する過去・現在・未来の家族構造

高知大学 池田 和夫 (ikedak@cc.kochi-u.ac.jp)

A study on family structures represented by Japanese university students: The characteristics of the past, the present and the future families

Kazuo Ikeda (Faculty of Humanities and Ergonomics, Kochi University, Japan)

## Abstract

This study investigated the characteristics of family structures in various situations represented by Japanese university students. Subjects were required to express the typical structures of their past and the present families, and the ideal structures of their families in the future using Family System Test (FAST). The classification revealed that cases classified into the 'balanced' were not so many in both the past and the present family representations although some changes were found in the hierarchy and cohesion with the growth of the children. In contrast, the majority of the ideal future representations were classified into the 'balanced'. This means that many Japanese students, just as the researchers in Western countries, assume that the ideal structures of their own families should be highly cohesive and must have some generational boundaries. In addition, other analyses showed the differences in the characteristics between the past, the present and the future family structures.

## Key words

family structure, Family System Test, generational boundary, Japanese university student

## 1. 目的

個人に関わる環境の中で、家族は最も重要な集団のひとつある。家族の構造や成員間の相互作用は個々のメンバーの心理や行動と深く関係しているであろう。特に、家族の中で成長する子供にとって、家族のあり方は人格形成や社会的適応に非常に強い影響を及ぼすに違いない。従来、家族に関する研究は様々な分野において行われてきたが、近年、心理学的研究が特に重要視され、家族心理学という分野が確立されるに至っている。家族心理学では、家族をひとつの心理社会的システムとして捉え、そこに生ずる様々な現象や問題をシステムズ・アプローチによって論じようとする。これは家族内外で子供や夫婦に起こる問題を、個人の問題として対処するよりも、家族というシステムの中で生じている問題としたほうが把握しやすく、問題の解決に向けて多くの示唆を得ることができるからである(亀口, 1992; 岡堂, 1991; 1992a)。

家族システムの分析において、親密さ (cohesion) と階層性 (hierarchy) が基本的な次元として考えられている(例えば, Nichols, 1984)。親密さとは、家族成員間の情緒的結びつきや愛情・愛着の程度を示すものであり、家族システム理論では、家族がどの程度ひとつのまとまりとして体制化されているかを示すものであると定義される。階層性に関しては、その背景となる仮説が複数存在するが、集団内の権威・意志決定力、あるいは一人のメンバーが他のメンバーに対して持つ影響力等として定義づけられる(Gehring, 1993; Gehring & Marti, 2000)。

家族の成員が上記の2次元をどのように認知しているのかを測定する手法として、シンボル配置技法が有効である(八田, 2001)。シンボル配置技法とは、同一平面上に家族成員を表す人形を配置し、ブロック等で人形に高さを与えることによって、様々な状況下での家族構造を表現させるものである。表現された結果における人形間の距離が成員間の親密さを示し、人形の相対的な高さが階層性を示すものであるとみなされる。代表的なシンボル配置技法として、八田(1977)が考案したDoll Location Test(以後、DLTと略称する)とGehring(1984; 1993)によって開発されたFamily System Test(以後、FASTと略称する)を挙げることができる。いずれの方法も、家族全員の関係を包括的に把握できる点、高度な言語表現能力を必要とせず広範な対象に実施できる点、心理的抵抗感が低く表現が容易である点、検査や採点に特別な技術を必要とせず検査の所要時間も短い点等、多くの利点を有している(Gehring, 1993; Gehring & Marti, 2000, 八田, 2001)。

本研究は、FASTを用いて大学生の表現する様々な場面の家族構造を検討する。FASTの実施によって、質的・量的両面において多くのデータが得られ、家族全体のシステムおよび内部の下位システムに関して様々な分析が可能であるが、Gehring(1993)が提唱した評価・分類基準では、次のような基本仮説が前提とされている。すなわち、家族全体のシステム構造において高い親密さと親子間に適切な階層性を持つ家族が健全な家族であり、問題のある家族では、家族全体の親密さが低く、親子間の階層性は過大か過小の状態にある場合が多いという仮説である(Minuchin, 1985; Youniss & Smollar, 1985)。同様な考え方は、世代間境界 (generational boundary) という概念によって両親サブシステムと親子サブシステムの関係性にも反映されている。

Gehring らは、従来の欧米における研究（例えば、Wood & Talmon, 1983）より、健全な家族には明確な世代間境界が存在するのに対して、問題のある家族では世代間境界が曖昧であると主張する。すなわち、健全な家族においては、両親や兄弟のような同世代間の相互作用と親子のような異世代間の相互作用は異なるルールによって支配されており、両親間の親密さは親子間の親密さよりも高い。また階層性に関しては、両親は子供よりある程度強い影響力を持っている。これに対して問題のある家族では、親子間が両親間よりも親密な世代間結合 (cross-generational coalition) が見られ、階層性においても親子間に差のない世代間平等や子供の影響力が親よりも強い階層性逆転 (hierarchy reversal) が見られる場合が多いというのである (Gehring, 1993; Gehring & Marti, 2000)。

上述のような仮説に基づき FAST における家族構造タイプの分類では、家族全体としての親密さが高く、親子間には適度な階層性が存在する家族を調和型 (balanced) とし、家族全体の親密さが低く、親子間の階層性に差のない場合と極端な差がある家族を、非調和型 (unbalanced) もしくは中間型 (labile-balanced) とする。スイスおよびアメリカの健全な家族の青少年に FAST を実施した先行研究では、いずれの結果においても現実場面 (通常の家族の状態) として表現された家族構造の約 7 割が調和型に分類され、欧米の家族の多くは、「健全な家族」の基準を満たしていることが示された (Feldman & Gehring, 1988; Gehring & Feldman, 1988; Gehring & Marti, 1993a; Gehring & Marti, 1993b; Marti & Gehring, 1992)。

これに対して、日本で行われた研究では異なる結果が報告されている。FAST を日本人大学生に実施した池田 (1996) によれば、調和型に分類される事例の比率は 4 割以下であり、多くの事例が非調和型や中間型に分類されている。この結果は、家族全体の親密さの低さに合わせて親子間の階層性に差異が見られないことに起因している。また、父母と子供の間の 2 者間距離を分析した結果においては、母子間の距離が両親間と同様に近いという世代間結合を示す結果も得られている。FAST による他の研究 (Ikeda & Hatta, 2000; 築地, 2000, 2001) や DLT を用いた研究 (Hatta, 1994; Hatta & Tsukiji, 1993) においても同様な結果が見出されており、これらの研究は、一般に母子密着・父親不在といわれる日本の家族構造の特異性を示すものであると思われる。

ところで、国や文化の違いによる家族構造の多様性に加えて、その構造は時間の経過によっても変化しうるものであると考えられる。そのひとつとして、子供の成長に伴う構造変化がある。例えば小高 (1998) は、子供の成長に応じて親子関係が次のように推移すると論じている。すなわち、親を尊敬し服従しながら情愛的に密着した A 型の関係、親に対して距離を置いて冷静に接することはできないが、情愛的な絆は弱い矛盾・葛藤を持つ B 型の関係、親に反発を感じ親と距離を置く C 型の関係、親を 1 人の人間として認める対等な D 型の関係である。そして、A 型の関係

は幼児期・児童期初期および中期に、B 型の関係は児童期の終わりから思春期に、C 型の関係は青年期前期・中期に、D 型の関係は青年期後期以降に代表的に見られる親子関係であるとしている。また、このような変化に家族が柔軟に対応することの重要性も指摘されている (岡堂, 1991; 1992b)。

家族構造に変化をもたらす他の要因は社会状況の変化である。日本の家族構造も時代とともに変化してきたが、今後もそれは継続していくものと予想される (例えば山田, 1994)。21 世紀を迎え、日本社会における様々なシステムや制度に新たな変化が生じ始めており、家族をめぐる環境も変動している。こうした社会の変化は家族のあり方に少なからぬ影響を及ぼし、その結果として、日本社会における家族構造の変化が今後これまで以上に加速することもありえよう。

このような状況の中、現代の大学生はこれまでの家族構造をどのように捉え、将来どのような家族を築こうと考えているのであろうか。前述のような日本特有の家族構造が、日本文化特有の家族観による恒常的なものであり今後も維持されるものであるのか、あるいは、戦後の社会的背景がもたらした過渡的な状態であり近い将来には異なるものとなるのか、変容するならばどのような変化が予想されるのか。本研究はこのような点に検討を加えることを目的とし、現代の大学生に、過去・現在そして未来の家族構造を FAST によって表現することを求める。

これまでに、FAST によって過去や未来の家族構造を表現させたものには、築地・八田 (1999) の研究がある。築地らは、被検者が 5 歳であった時点の家族構造と将来子供を持った時に作りたい家族像を表現させ、スイスの女子学生の結果と比較している。その結果、過去・未来ともに日本の方がスイスよりも家族の親密さが低いこと、未来の家族像において、スイスの結果は中程度の階層性が多数を占めるのに対し、日本の家族では過度の階層性や世代間平等の家族が比較的多いことなどが示されている。この研究は、過去や未来の家族像にも国際間で差異があることを示唆するものであるが、過去表現が 5 歳時の一場面のみであるので、その後の変化については不明である。また、未来場面での子供の年齢を指定していないため、どの時点での表現なのかを特定することができない。また、被検者が全員女性であり性差に関する比較が不可能であったので、その検討の必要性も残されている。

そこで本研究では、現在の家族構造の表現に加えて、被検者が 8 歳あるいは 14 歳であった時点での家族構造の表現を求め、児童期から思春期さらには青年期にいたる変化を被検者がどのように捉えているかを検討する。また、未来場面の表現も、被検者の第 1 子の年齢を 8 歳および 14 歳に指定し、それぞれの時点で理想とされる家族構造の表現を比較する。また本研究では、家族構造タイプの分類や親子間の距離の分析に加え、世代間結合や両親下位システムの階層性に関して、従来十分に検討されていない指標による分析を行い、性差等に関する新たな知見を得ることも目

的とする。

## 2. 方法

### 2.1 被検者

本研究では、地方国立大学生46名にFASTを実施したが、これより母子家庭3例と回答に不備のあったもの1例を分析から除いた。その結果、分析の対象とした被検者は42名（女性23名、男性19名）となった。被検者の年齢は18～23歳（平均19.9歳）であり、第1子が23名、第2子が11名、第3子が8名であった。被検者の家族は、2世代家族が23例、3世代家族が19例であった。また、被検者の申告によれば、いずれの被検者および家族成員の中にこれまで重大な心的不適応を持ったものはいなかった。

### 2.2 検査期間

本研究の検査は、2001年10月18日より同年11月9日の間に行われた。

### 2.3 検査用具

Beltz Test社製のFamily System Test (FAST)一式を用いた。このテストセットは、9×9の格子（1格子が5×5cm）が描かれたテスト盤、男女をシンボル化した木製人形および低・中・高の3種類のブロックから構成されていた。人形の高さはいずれも8cm、ブロックの高さはそれぞれ1.5cm、3.0cm、4.5cmであった。本研究では、無彩色の人形のみを用い、彩色人形は使用しなかった。

### 2.4 検査手続き

検査は、実験室内において被検者と検査者がテスト盤をはさんで対面する形で、個別に行われた。検査の開始に先立ち、研究の目的および検査結果の取り扱いに関して説明し、検査参加への同意を得た上で家族情報の記入を求めた。記載事項は、検査時の家族成員の立場（父・母・第1子・第2子等）、生年月日・年齢、所属（職業・学校等）などであった。なお、同居・非同居の区別に関しては、進学等で一時的に家族から離れている者は同居家族成員とし、結婚等で別の世帯を有しているものは非同居家族成員として、それぞれの欄に記入を求めた。

FASTはGehring (1993) のマニュアルに沿って行われた。家族の表現法に関しては、実際に検査用具を用いて具体例を示しながら次の点を教示した。(1) FASTは、テスト盤・人形およびブロックを用いて家族メンバーの親密さや階層性を表現するものである。(2) 家族メンバー間の親密さは人形の距離によって表現され、2つの人形が隣接するときには2者間の親密さが最も高く、人形間の距離が遠くなるにつれて親密さが低くなることを示す。(3) 家族メンバーの階層性は、ブロックを用いて人形の高さに差をつけることにより表現され、人形の高さが高いほどそのメンバーが家族内で大きな影響力を持ち、人形の高さに差がある程両者の影響力にも差があることを表す。(4) 人形を回転させることによって、人形の視線方向を変えることができる。

本研究では、現在の家族状況（現在場面）、被検者が8歳時の家族状況（過去8歳場面）、被検者が14歳時の家族状況（過去14歳場面）、将来被検者の子供が8歳になった時の理想の家族状況（未来8歳場面）、その子供が14歳になった時の理想の家族状況（未来14歳場面）をこの順に表現することが求められた。なお、過去場面においては、検査時には死去等で家族メンバーでなくなっている者の配置も求めた。また、未来場面においては、年齢を指定した子供（8歳あるいは14歳）を第1子とするように教示したが、その子供の性別や弟・妹の有無、祖父母の有無など他の家族メンバーについては、各被検者の意思に任せた。それぞれの場面の表現が終了した時点で、表現された状況に関するインタビューを行った。検査に要した時間は約30分であった。

## 3. 結果

### 3.1 家族構造タイプの分類

それぞれの場面において表現された家族構造を、Gehring (1993) の提唱した基準に従って分類した。この分類法では、親密さが「高」・「中」・「低」、階層性が「大」・「中」・「小」の3段階に評価される。さらに、その結果の組み合わせによって、家族構造タイプが「調和型」・「中間型」・「非調和型」の3タイプに分類される。

家族レベルにおける親密さの評価では、家族全員の人形が3×3の区画内に隣接するように配置された場合には、親密さが「高」とされる。家族全員が3×3の区画内に配置されても、隣接しない人形がある場合には、親密さは「中」と評価される。また、家族メンバーが5人以上の時には、4名の人形が3×3の区画内にあり、他の人形が区画外にあっても区画内の人形と隣接しておかれている場合、もしくは家族全員が一列に並べられている場合にも親密さは「中」となる。上記以外の配置はすべて親密さが「低」と評価される。一方、家族レベルにおける階層性は親と子の影響力の差に注目し、それぞれの人形の下におかれたブロックの高さ（小ブロックの高さを1とする）によって、次の通り評価される。すなわち、父母のうち低い方の親の高さから、最も高く表現された子供の高さを引き、その値が3以上の場合には「大」階層性、2ないし1の場合には「中」階層性、0以下の場合には「小」階層性と評価される。この値がマイナスとなる場合も階層性は「低」に分類されるが、このような事例は特に「階層性逆転」と呼ばれる。

上記の基準に基づく全事例の分類結果を、横軸に親密さの評価、縦軸に階層性の評価をとるマトリックス上に度数分布として表現した。表1～5は、過去8歳・過去14歳・現実・未来8歳・未来14歳の各場面における度数分布を示したものである。いずれの場面の分類においても、3世代あるいは4世代家族の場合には祖父母を分析の対象から除外し、父母と子供の配置および高さについてのみ分析を行った。なお、未来場面では2世代家族が37例、3世代家族は4例、4世代家族は1例表現された。また、未来場面

表1：過去8歳場面における家族構造の親密さと階層性評価

計	9	17	16	42
大	0	3	1	4
中	7	10	11	28
小	2	4	4	10
	低	中	高	計

親密さ

表5：未来14歳場面における家族構造の親密さと階層性評価

計	5	14	23	42
大	0	0	0	0
中	3	8	18	29
小	2	6	5	13
	低	中	高	計

親密さ

表2：過去14歳場面における家族構造の親密さと階層性評価

計	19	9	14	42
大	1	0	0	1
中	10	7	9	26
小	8	2	5	15
	低	中	高	計

親密さ

での子供数は、1人が6例、2人が24例、3人が11例、4人が1例であった。

続いて、これらのマトリックスより家族構造タイプの分類を行った。この分類では、階層性が「中」で、親密さが「中」あるいは「高」の家族を調和型の家族とする。階層性が「中」で親密さが「低」の家族、あるいは階層性が「高」もしくは「低」で親密さが「中」の家族は中間型に分類される。これ以外の場合、すなわち、「高」・「低」の親密さと「大」・「小」の階層性の組み合わせである場合には非調和型の家族に分類される。それぞれの場面において、各家族構造タイプに分類された事例の比率を図1に示す。過去8歳場面の表現では、調和型の比率が最も高いが、その値は50%に留まっている。この場面における非調和型の比率は低い。過去14歳場面では、調和型の比率が全場面のなかで最低となっているが、現実場面と比べると非調和型も少なく、中間型の比率が相対的に高くなっている。現実場面の表現においては、調和型に最も多くの家族が分類されているが、ほぼ同数の家族が非調和型にも分類されている。一方、未来の家族構造表現においては調和型が高い比率を占め、特に未来8歳場面では8割近くの家族が調和型に分類されている。未来14歳場面においては、調和型の比率が多少低下しているものの、その比率は6割を超え、他のタイプに比べて高い値が維持されている。

表3：現在場面における家族構造の親密さと階層性評価

計	12	13	17	42
大	1	0	0	1
中	3	9	9	21
小	8	4	8	20
	低	中	高	計

親密さ

表4：未来8歳場面における家族構造の親密さと階層性評価

計	1	8	33	42
大	0	1	0	1
中	1	5	27	33
小	0	2	6	8
	低	中	高	計

親密さ

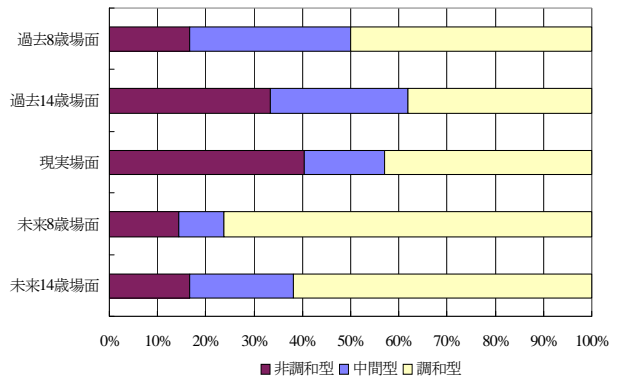


図1：各場面における家族構造タイプの比率

各場面における男女別の家族構造タイプの事例数に関してカイ2乗検定を行った結果、いずれの場面においても分布に有意な男女差は見出されなかった。階層性逆転の事例数に関しては、過去14歳場面では4例(全体の9.5%)、現在場面では5例(全体の11.9%)であった。過去8歳場面・未来8歳場面および未来14歳場面において、階層性逆転は1例も見られなかった。

### 3.2 父母子間の2者間距離に関する分析

本研究の各場面において配置された父母と子供の人形間の距離より、成員間の親密さに関する分析を行った。成員間の親密さを表す指標は、隣接する区画の距離を1とする人形間のユークリッド距離を用いた(Gehring, 1993)。対象とした子供は、現実場面・過去8歳場面・過去14歳場面では被検者とし、未来8歳場面および未来14歳場面では第1子とした。表6は、各場面における父母間・父子間および母子間の距離の平均と標準偏差を示したものである。場面ごとに分散分析を行ったところ、過去8歳場面・過去14歳場面および未来14歳場面において有意差が得られた(過去8歳場面:F(2,82)=3.93, p<.05, 過去14歳場面:F(2,82)=4.87, p<.05, 未来14歳場面 F(2,82)=5.93, p<.01)。有意差の所在を明らかにするためにTukey法による下位検定を行った結果、過去8歳場面では、父母間距離よりも母子間距離が有意に長く(q=3.70, p<.05)、父子間の距離は父母間距離および母子間距離よりも有意に長い(それぞれ、q=9.32, p<.01; q=5.52, p<.01)ことが判明した。過去14歳場面でも同様に、父母間距離よりも母子間距離が有意に長く(q=3.76, p<.05)、父子間の距離は父母間距離および母子間距離よりも有意に長い(それぞれ、q=8.11, p<.01; q=4.35, p<.01)という結果が得られた。未来14歳場面では、父母間距離が父子間距離および母子間距離よりも有意に短い(それぞれ、q=7.31, p<.01; q=7.86, p<.01)、父子間距離と母子間距離との間には有意差は検出されなかった。

表6: 各場面における2者間距離の平均および標準偏差

		父母間	父子間	母子間
過去8歳場面	平均	1.29	1.96	1.56
	標準偏差	0.28	0.79	0.57
過去14歳場面	平均	1.41	2.26	1.81
	標準偏差	0.59	1.14	0.75
現実場面	平均	1.38	1.98	1.69
	標準偏差	0.72	1.05	0.74
未来8歳場面	平均	1.11	1.37	1.39
	標準偏差	0.09	0.30	0.21
未来14歳場面	平均	1.17	1.73	1.78
	標準偏差	0.14	0.65	0.62

### 3.3 世代間結合に関する分析

父母間の距離よりも、いずれかの親子間の距離が近いケース(本研究の分析において、距離が等しい場合は含まない)を世代間結合と呼ぶ。これに該当する事例数は、過去8歳場面では8例、過去14歳場面では10例、現在場面では8例、未来8歳場面では3例、未来14歳場面では4例であった。現在

場面で世代間結合を示した8例のうち7例は、過去のいずれかの場面でも世代間結合の家族構造を表現していた。また、2つの未来場面においてともに世代間結合を示した被検者は一人のみで、この被検者は過去・現在場面においては世代間結合の家族構造を表現していなかった。未来場面において世代間結合を表した他の被検者は、過去あるいは現在場面でも世代間結合の関係を表現していた。世代間結合の家族構造を表した全34事例のうち、17例が男性被検者、16例が女性被検者によるものであり、性差は見られなかった。

### 3.4 両親下位システムの階層性に関する分析

両親間の階層性に関して、父親の高さから母親の高さを減じた値を算出した。表7は、場面毎に各値の事例数および比率を示したものである。表から明らかのように、過去および現在場面においては、父母間に差のない事例が4割程度であるが、未来場面では全体の3分の2を占めるに至っている。次に高い比率となるのは、いずれの場面においても父が母よりも1ブロック高く表現されるケースであった。未来場面に比べて、過去・現在場面が多少高い値となっている。未来場面では、これ以外にはごく少数事例が散見されるのみであるが、過去および現在場面では「-1」にも1割程度のケースが分類された。

表7: 各場面における両親下位システムの階層性

父母間の高さの差		-2	-1	0	1	2	3	4	5
過去8歳場面	事例数	2	4	19	12	3	2	0	0
	比率	4.8%	9.5%	45.2%	28.6%	7.1%	4.8%	0.0%	0.0%
過去14歳場面	事例数	1	6	17	15	2	0	0	0
	比率	2.4%	14.3%	40.5%	35.7%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%
現在場面	事例数	1	7	18	12	2	1	0	1
	比率	2.4%	16.7%	42.9%	28.6%	4.8%	2.4%	0.0%	2.4%
未来8歳場面	事例数	0	0	29	11	1	1	0	0
	比率	0.0%	0.0%	69.0%	26.2%	2.4%	2.4%	0.0%	0.0%
未来14歳場面	事例数	0	1	28	10	1	1	1	0
	比率	0.0%	2.4%	66.7%	23.8%	2.4%	2.4%	2.4%	0.0%

## 4. 考察

本研究では、FASTを用いて過去・現在・未来の家族構造の表現を求め、様々な分析を加えた。その結果に基づき、はじめに家族構造の過去から現在への変化に関して考察し、続いて将来の理想として表現された家族像について論じたい。

まず、家族構造タイプの分類の結果、過去8歳場面では調和型に分類される家族構造が最多となった。これは、被検者が児童期にあったころは、親子間に一定の階層性が存在し、家族全体が比較的親密であったとする者が多かったということを表している。しかしながら、その事例数は全体の半数に留まっており、欧米の研究で示されるほど高い比率とはなっていない。この原因は、階層性が「小」となる事例がいずれも2割程度存在することにある。日本の家族においては、子供が児童期にある時期より世代間平等の関係が少なからず存在することが示唆される。過去14歳場面では、調和型に分類される事例数が非常に少なくなり、非調和型の増加が見られる。これは、階層性「小」の事例

数が一層増したことに加えて、親密さも低下したことに起因している。階層性逆転の事例もこの時期より現れるので、子供が思春期を迎えるころになると、いずれかの親(多くの場合、母親)と対等以上の関係になり、同時に両親と一定の距離を持つ子供が現れてくる場合が多くなったものと推測できる。現在場面の分類結果では、親密さが再び高くなる傾向が見られるが、階層性「小」の事例が全体の半数となるため、結果的に調和型は全体の4割程度に留まり、非調和型の占める割合が調和型とほぼ同じ比率まで上昇する。本研究における家族構造タイプの特徴に、前述の小高(1998)の類型を重ねると、過去8歳場面がA型に、過去14歳場面がB型ないしC型に、現在場面がD型に対応していると見ることができよう。しかしながら、全ての家族がこのように推移するものではないということも本研究の結果は示している。

現在場面の多くの事例が調和型に分類されないという本研究の結果は、日本の大学生を対象として行われた従来の研究結果(池田, 1996; Ikeda & Hatta, 2001; 築地, 2000)と一致するところであり、欧米の研究結果とは異なるものである。従来の研究において、この差異には次のような副次的要因が影響している可能性があると言指されてきた(池田, 1996; Ikeda & Hatta, 2000)。そのひとつは、日本の家族の場合3世代家族が比較的多く含まれており、評価の際にこれが家族全体の親密さを低下させるのではないかという点である。しかしながら、本研究では、祖父母を除外して評価を行ったので、この可能性は否定されよう。他のひとつは、日本の研究における被検者(青年期後期)の年齢層が、欧米の研究の被検者(青年期前期)よりも高いという点であった。確かに、年齢が高くなるにつれて親との階層性が「小」に移行する傾向が見られるが、過去14歳場面の表現でも階層性「小」の比率は欧米の値より高く、調和型の比率も4割に満たないので、この可能性も否定することができよう。したがって、本研究の結果から、欧米と日本の研究結果に見られる家族構造タイプの分布差は、上記のような原因によるものでなく、夫婦および親子間の構造に本質的に見られる相違によるものであると断言することができるであろう。

父母と被検者間の2者間距離の分析結果より、過去8歳場面および過去14歳場面では、父母間の距離が最短となり、母子間距離が続き、父子間距離が最長となっている。したがって、過去の両場面においては、被検者を含む親子関係に親密さの世代間境界があったと認知されていると言えよう。築地・八田(1999)における過去場面の表現では、日本・スイスともに、平均距離が母子間、父母間、父子間の順となり、有意差は母子間と父子間に得られている。この結果は母子間に強い親密さが見られ、明瞭な世代間境界が認められないことを示すものである。本研究の結果との不一致がいかなる原因によるものか、現時点では断定できないが、築地らの研究では子供の年齢を幼児期である5歳に設定しているので、子供の年齢差が一因となっているかもしれない。父子間距離が他の距離に比較して長く表現さ

れている点は、両研究に共通して見出されている。特に、過去14歳表現における父子間距離は大きな値となっており、思春期における父子の乖離が示されたものであると考えられる。

現実場面の2者間距離に関して、日本人大学生を対象とした従来の研究(池田, 1996; Ikeda & Hatta, 2000; 築地, 2000)では、母子間が父母間よりも短いか等しい距離にあり、父子間距離がこれよりも有意に長いという結果が示されてきた。しかしながら、本研究の現在場面ではいずれの距離の間にも有意差が見出されなかった。本研究で算出された平均距離を見ると、従来の値よりも父母間距離および父子間距離が小さい。これは、本研究の被検者が何らかの点で特殊であったためとも考えられるが、時代的変化の兆しを反映するものである可能性も否定できない。いずれにしても、現在場面の表現においては世代間境界の消失が見られ、青年期後期を迎えた現時点においても、被検者と親との心理的距離が近いことが示唆される。

被検者以外の子供も含めた世代間結合に関する分析の結果からは、過去8歳・過去14歳および現在場面のいずれにおいても、ほぼ2割の家族に世代間結合が見られた。そして現実場面に世代間結合を示す事例の大部分が、過去の時点から継続的にその状態を示していることが明らかとなった。平均距離を分析した前述の結果とあわせると、世代間境界を持つ家族と世代間結合を持つ家族が比較的早い時期より並存していると見ることができよう。

以上のように、本研究の結果より、子供の成長に伴って家族構造が変化してきたことを被検者が認知している傾向が総体的には示されたと言えよう。しかしながら、その変化には多様性が認められ、一定数の家族において世代間結合や世代間平等、あるいは階層性逆転が比較的早い段階から始まっていることが示唆される。ただし、本研究の結果には、従来の研究結果と整合しない点も示されているので、今後より多くのデータ収集と詳細な検討によって、その原因の解明が必要とされよう。また、本研究の過去場面の表現は被検者の記憶に基づくものであるため、児童期や思春期の子供を対象にFASTを実施する横断的あるいは縦断的研究も行われなければならない。

続いて、未来の家族構造についてであるが、第一に言えることは、非常に多くの事例が類似した形で表現されたということである。家族構造タイプの分類結果では、過去・現在場面の表現と異なり、多数の家族構造が調和型に分類された。特に未来8歳場面の表現においては、8割近くの事例が調和型に分類されている。これは、高い親密さを持ち、親子間に一定の階層性のある家族を、被検者の大多数が理想として表現した結果である。未来14歳場面では、親密さと階層性に多少の低下が見られるが、調和型に分類される比率は依然6割を超えている。これまでの研究(池田, 1996; Ikeda & Hatta, 2000)でも、子供の立場から理想場面を表現すると調和型が増加する傾向は見られたが、その比率は4割程度に過ぎなかった。したがって、本研究で得られたような調和型への集中は、親の立場から表現された未来の理

想的家族構造に特有のものであると考えられる。

父母子間の2者間距離による分析では、未来8歳場面の結果に世代間境界が見られなかったが、これは父母と子供がいずれも非常に近接した形で表現されたことによるものである。父母の人形は全42事例中36ケースにおいて隣接するマスに置かれており、子供の人形もそれに近接する位置に置かれることが多い。子供が児童期にある間は、家族全体が高い親密さで結ばれている状態が理想とされているのである。未来14歳場面になっても父母間の距離に大きな変化はないが（隣接して置かれた事例は34ケース）、父母と子供との距離が遠くなり、結果的に世代間境界が有意な差となって現れた。しかも、この世代間境界は、過去場面に見られたような父親乖離の歪んだ形ではなく、父子間と父母間の距離がほぼ等しい均整の取れた形となっている。両親下位システムの階層性の分析においても夫婦関係のあり方に均一化が見られた。未来場面では3分の2の被検者が等しい力関係の夫婦を理想としており、夫に多少強い影響力のある関係を含めると、その比率は全体の9割以上となる。したがって、男女ともに、夫婦間に大きな階層性があることは望んでいないものと思われる。また、未来場面においては世代間結合の事例も少数であり、そのほとんどが近接する両親に子供が挟まれているという形をとっていることも明らかとなった。

以上のような未来場面の分析結果を総合すると、今回被検者となった大学生の多くが、男女ともに、非常に親密で平等な夫婦関係を望み、親子間には適当な階層性があることを理想としていると言えることができる。さらに、子供の成長とともに、親子間の一定の距離をとることによって、親密さにおいても世代間境界も持とうと考えていることがうかがえる。先にも述べたように、このような家族構造は、西洋において理想的な家族構造と考えられているものであり、これまで日本における研究で示されてきた日本の家族構造の特徴がすべて消失していると見ることができる。未来の家族の理想像がこのような形となった原因を同定することは困難であるが、少なくとも現代の若者が従来の家族のあり方に不満や反省を共有しているという可能性が示唆される。父親不在・母子密着型の日本の家族構造を彼らは是認していないのである。また、今回の被検者の親たちの多くは、終戦から一定の期間が経過した後（1950年前後）に誕生した世代であり、欧米の思潮の浸透に伴う社会的ムーブメントを経験した世代である。そこで萌芽した新たな価値観や家族観が次世代である現代の大学生に影響を及ぼし始めているのかもしれない。加えて、教育やメディアによる影響も看過できないであろう。特に、男女平等的な夫婦観をはじめ、家族構造の表現の結果に性差が見られなかった点に、このような影響は表われているものと思われる。いずれにしても、価値観や家族のあり方の多様化が予想される一方で、本研究の結果において、理想の家族構造に均一化が見られたことは注目に値するであろう。

ただし、本研究の未来場面で示された家族構造は、あくまでも被検者自身が親となった状況を想定し、その理想像

を表現したものである。このような理想が必ずしも実現されるものではないだろう。10年後あるいは20年後、様々な現実的要因の影響が加えられた結果として、日本の若者が実際にどのような家族を築いているのか、非常に興味深いところである。今後も長期間にわたる継続的な研究が期待される。

## 引用文献

- Feldman, S. S., & Gehringer, T. M. Changing perceptions of family cohesion and power across adolescence, *Child Development*, 59, 1034-1045.
- Gehringer, T. M. 1984 Der Familiensystemtest (FAST); Projekt für eine Pilotstudie. Universität Zürich: Poliklinik für Kinder und Jugendliche (NAPS-3)
- Gehringer, T. M. 1993 *Family System Test (FAST) Manual*. Beltz Test Gesellschaft.
- Gehringer, T. M., & Feldman, S. S., 1988 Adolescents' perceptions of family cohesion and power: A methodological study of the Family System Test. *Journal of Adolescent Research*, 3, 33-35.
- Gehringer, T. M., & Marti, D. 1993a The architecture of family structure: Toward a spatial concept for measuring cohesion and hierarchy. *Family Process*, 32, 135-139.
- Gehringer, T. M., & Marti, D. 1993b The Family System Test: Differences in perception of family structures between nonclinical and clinical children. *The Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 34, 363-377.
- Gehringer, T. M., & Marti, D. 2000 Concept and psychometric properties of the FAST. In T. Gehringer, M. Dabry, & P. Smith (Eds.) *The Family System Test (FAST): Theory and Application*, Routledge, 3-27.
- 八田武志 1977 Doll Location Testに関する研究(Ⅰ) — 精神神経症患者への適用例について — 適性研究, 10, 1-6.
- Hatta, T. 1994 Projected family structure by modern Japanese adolescents. *Social Behavior and Personality*, 21, 7-16.
- 八田武志 2001 シンボル配置技法の理論的背景 八田武志(編) シンボル配置技法の理論と実際 ナカニシヤ出版, 1-18.
- Hatta, T., & Tsukiji, N. 1993 Characteristics of Japanese family: Evidence from the results of the Doll Location Test by university students. *Psychologia*, 36, 235-240.
- 池田和夫 1996 日本人大学生における家族構造認知の特徴 — Family System Test による国際比較 — 高知大学人文学部人文学科人文科学研究, 4, 11-20.
- Ikeda, K., & Hatta, T. 2000 Perceptions of family structures by Japanese students. In T. Gehringer, M. Dabry, & P. Smith (Eds.) *The Family System Test (FAST): Theory and Application*, Routledge, 179-193.
- 亀口憲治 1992 家族の心理過程 岡堂哲雄(編) 家族心理学入門 培風館, 25-33.

- 小高恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.
- Marti, D., & Gehring, T. M. 1992 Is there a relationship between children's mental disorders and their ideal family constructs? *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 31, 490-494.
- Minuchin, S. 1985 Families and individual development: Provocations from the field of family therapy. *Child Development*, 56, 289-302.
- Nichols, M. 1984 *Family therapy: Concepts and methods*. Gardner Press.
- 岡堂哲雄 1991 家族心理学講義 金子書房
- 岡堂哲雄 1992a 家族心理学の課題と方法 岡堂哲雄(編) 家族心理学入門 培風館, 1-11.
- 岡堂哲雄 1992 b 家族ライフ・コースと発達段階 岡堂哲雄(編) 家族心理学入門 培風館, 85-95.
- 築地典絵 2000 Family System Testによる青年期女子の家族関係構造の特徴 京都女子大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程完成記念論文集, 205-221.
- 築地典絵 2001 Family System Testの基礎的研究 I — FACES IIIおよび疎外感尺度との比較を通して— カウンセリング研究, 34, 136-144.
- 築地典絵・八田武志 1999 日本およびスイスの女子学生の家族構造認知と未来展望について 平成9～10年度科学研究費補助金(国際学術研究)研究成果報告書, 「ストレス状況下における家族の情報方略および意思決定機構に関する研究」, 22-35.
- Wood, B., & Talmon, M. 1983 Family boundaries in transition: A search for alternatives. *Family Process*, 22, 347-357.
- 山田昌弘 1994 近代家族のゆくえ — 家族と愛情のパラドックス— 新曜社
- Youniss, J., & Smollar, S. 1985 *Adolescent relations with mothers, fathers and friends*. University of Chicago Press.

### 付記

FASTの実施およびデータ入力・分析において、高知大学人文学部平成13年度卒業生である和田美有希氏の協力を得た。また、本研究と同一のデータに基づき同氏の卒業論文が作成された。

(受稿：2003年6月9日 受理：2003年6月27日)